

脊椎の退行変性疾患に対する手術方針

1) 腰椎

手術治療は最少侵襲を原則にしている。最小侵襲手術では対応できない疾患においても、病気の状態（病態）に応じて、可能な限り侵襲性の低い手術法を採用する。

退行変性による脊椎疾患の中では、椎間板ヘルニアや狭窄症などが最も多く、これらには顕微鏡下の最小侵襲手術である MD 法を行う。一方、腰椎すべり症では、侵襲性を可能な限り低減した腰椎固定術を行う。

最小侵襲手術のメリットを列挙すると、

- 1) 不要な操作が少ないため、手術時間の短縮と出血量の減少が図られる。
- 2) 手術後の痛みは軽いため、術後鎮痛剤の必要性は低く、麻薬は不要である。
- 3) 手術翌日から離床開始できる。
- 4) 早期の社会復帰
- 5) 術後感染リスクは皆無に近い。
- 6) 出血量が少ないため、輸血は不要である。

MD 法とは、チューブ・レトレクターと手術顕微鏡を用いて、可能な限り小さな皮膚切開と筋肉剥離操作で椎間板ヘルニアの摘出や神経の除圧を行う手術法です。この手術法では、疾患に応じて直径 16mm、18mm、20mm、22mm の 4 種類のチューブ・レトレクターが使い分けられる。